

日蓮教団史の諸問題

宮崎英修

只今御紹介にあずかりました宮崎でございます。別に最終講義であるからといって、特に、事新しい研究発表をするという訳でもございません。もう今迄皆さんに語り尽くし、皆さんと一緒に研究し尽くしたと思われるような事を、ここで思い出しながら申し上げるという事になるかと思っております。省みますと、昭和十八年の二月に、北支の戦線から帰ってきました。敦賀の連隊で召集解除となり、五年二カ月ぶりで、田舎に帰ってきました。この年の四月に前々から、亡くなられました浅井要麟先生から、帰ったらすぐに学校に来るようにと言われておったものから、参って、そのまま当時の香風学寮の副寮監を務めさせてもらいまして、それに当時、諏訪大佐、若林大^{おおま}という教官がおられました、その教官のお手伝いをして、学生諸君に、銃剣術と射撃を、徹底的に詰め込んだ事を覚えております。これも古の事で、この中にも、そういうしごきにあった人もまだおられますけれども。なにしろ四十年、四十年というと、「おぎゃあ」と生まれた人がもう四十です、不惑の歳になるんですから。いつのまにやら私も歳をとりました。こうして、皆さんと最終講義だと言われて、記念講演をするという事は、まことに、面映ゆいことだと思いますけれども、一つ聞いていただきます。

この前、教団史研究の問題点について、二、三の点を申し上げた事がありました。その時には、一つの御山の記録であって、しかも当時の日蓮宗の教団の成立であるとか、あるいは展開であるとか、消長であるとかという事が、一つの本山の記録の中で知る事が出来る。そういう例としまして、京都の妙頭寺の『龍華秘書』、京都の本能寺の

『本能寺文書』、又近年、中尾堯教授が編まれた物でありますけれども、『中山法華經寺史料』と、こういう物が、我々の教団の歴史を目のあたりに、生々とした姿でもって、展開させてきてくれる。そういう点について、これらは絶対に見落しとちやならんという事を、注意を促す為にお話した事がございました。あるいは又、日蓮聖人の遺文でも、これは偽書である、これは偽撰であるといって、取り捨ててしまつてはならないという一つの例としまして、『本門宗要抄』というのを挙げました。この『本門宗要抄』というのは、日蓮聖人滅後、約四、五十年頃の成立と見られておりますから、そこで『本門宗要抄』に載せられている諸般の事象について、真蹟でないから、真撰でないからといって、捨ててしまうのは史実に対し目をおおうことになりましょう。何を取るのかという取捨の問題が今度残ってくる訳でございますけれども、取捨については、一応の分別を持たなければ、取捨撰択は出来ないと思ふのです。教団史に対しても日蓮聖人の思想・行動をしるす遺文について文献批判を考慮せず、すべて御書は真撰であるから、捨ててはならぬと。何でもかんでも無批判にこれを取つて、これが日蓮聖人の本當の姿であるなんて、こう考えられたのではつまらない。そういう事は勿論、一応の日蓮聖人の行動思想について、分別をもつてあたらなければならぬと思ふのです。早い話が、『宗要抄』は上巻下巻と分けてありますけれども、上巻には富士門流の独自の教説が日蓮聖人の説として、取り上げられております。これは宗祖滅後四、五十年頃に、富士門流では日蓮聖人の考え方であると思われて取り上げられておつたという歴史的な事実を、この時点で捉える事が出来る。ですからその中に説かれている事は、その当時における日蓮聖人に対する富士門流の人々の理解の点であつたという事に価値があるのです。日蓮聖人の教義・思想であるという価値より、その当時に信ぜられておつた所の日蓮聖人の教学という面で、価値があるという事を、知っておいていただきたいと思ふのです。あるいは下巻の方になりますと、聖人の自叙伝になっておりますけれども、その自叙伝というのは恐らくは、当時の人々が日蓮聖人に親近し、あるいは日蓮聖人の話を伝承として聞いた人、あるいは自分達が日蓮聖人の事について、他の人々からこうであつた、あつたであつたという事を聞

いて、それを自門の日蓮聖人に対する事蹟として受け取めている。恐らく当時の人々が日蓮聖人はこういう顔であったとか、こういう事があったとか、その日はこうであったとか、何年の何月であったとか、という事が概ね正確に伝承されて、言い伝えられてきているのであらうと考えられます。その中に載せられている所の日蓮聖人の業績は、一般周知のものとしてまず信頼していいのではないかという判断が付けられる訳です。要するに、その判断については傍証がある訳です。その中にある事について外の人が、どう考えているであらうか、という事について全然触れられていないのならば、問題がのこりますけれども、例えば、日蓮聖人の生まれたのは二月十六日であるという所伝が、『本門宗要抄』にのせられていますがこの事は日興上人の新六の一人である大石寺三世日道の『日蓮聖人御伝土代』の中に、ちゃんと二月十六日の生まれであるという事が書かれてありますと、『本門宗要抄』の日蓮聖人の生まれを二月十六日とする事は、概ね、正確を伝えている物であるという事が出来る訳です。そういう事を、この前の時に一応注意を促して見るといふ点で申し上げた事がございました。

今日は、近世初頭における日蓮宗史上の二、三の問題について述べてみたいと思います。大体、五つばかり考えてみました。全部出来るかどうか分かりませんが、まず、日蓮聖人の御書の出版について、一つ申し上げてみたいと思います。日蓮聖人の御書の出版については、最近、冠教授が近世出版史における日蓮聖人の遺文について論ぜられ今度大きな本が出ますから、皆さん、一つ刮目し楽しみにして御覧になっていただきたいと思います。これについて近世初頭における受不受の問題について述べてみたいと思います。さらに、日蓮宗は当時、宗論を厳禁されました。そこで厳禁された宗論が、今度は文書の上で取り上げられることになるのですが、いわゆる文書宗論について見てみたいと思います。又次に、不受不施義がどのような展開をしておったかという点についても触れてみようと思います。又、日蓮宗が近世初頭では強力な政権から目の敵にされ、いろんな宗教活動、布教活動が出来なくなってきましたが、その中で祈禱という点について、どういう面でその祈禱が生かされてきたか、という点も申し上げてみたいと

思うのでありますが、果たして全部申し上げる事が出来るかどうか分りません。けれども、こういう事は少なくとも前々から学生諸君には、申し上げておいた事でありませぬ。しかし一般的には学生諸君との交際は四年間しかない。それ以上前にも三十六年間の間に申した事がありますから、あるいは聞いていない人があるかも知れませぬし聞いてない事もあるかも知れませぬから、ちょっと今日聞いていただきたいと思ひまして、おおけなくも、記念講演ということになった訳でございます。

さて、日蓮聖人の御書について、一番最初に出版された物というと、諸君も御存じのように百部摺本すずほんです。この百部摺本というのは慶長七、八年頃に、一如院日重上人が今まで書写されてきた御書とくに五大部について、日蓮聖人の御真蹟と対照してこれを校訂してみたい、校訂した物を世に残したいと、考えられました。これを日乾、日遠の二人の高弟が自身の業としてこれを受けた訳であります。五大部というと、まず『安国論』は中山にもありますけれども、一本が身延にもありまして御真蹟が残っておる。当時残っておった五大部の内で、身延にどういふ物が残っておったかと申しますと、『安国論』に『報恩抄』に『開目抄』。この三つが残っておったんです。それから『観心本尊抄』は中山に残っておった。『撰時抄』は玉沢の妙法華寺に残っておった。そうしますと、三ヶ寺については、この日重・日乾・日遠の三師は、よく知悉しているところの寺である。知っておる寺でありますから、頼めばちゃんと見せてくれます。普通の人と違う著名な重・乾・遠三師ですから、重師は早く亡くなりましたけれども、乾・遠の二人がこの五大部を校訂して世に出しました。わずかに百部しか摺らなかつたといわれておりますけれども、これを百部摺本といって、文禄四年の頃にこれが出版されました。ところが現在は一冊も残っていないんです。聞くところによりますと、亡くなりました稲田海素先生が一冊だけ持って、これは『安国論』であつたか『本尊抄』であつたか、持っておられたと。けれども先生の御遺蔵の蔵書を先年調査いたしました時も、とうとうこの五大部百部摺本は発見することができませんでした。あることはあつても出されなかつたか、とも考えております。そういう風に百部摺本と

いうものの形はわかりませんが、幸いにして深見要言という人が、江戸の末、いわゆる化政時代と称する、あの絢爛豪華な時代の文化五年（一八〇九）の頃に、それによって五大部御書を出しました。で、表紙とか、見返しであるとかいうところを、百部摺本の表紙、見返し等を模して、一つの形だけは残しておかれました。こうして現在残っておるのが要言版と称するものです。これによって百部摺本の一つの面影を偲ぶことができるわけです。

次に、中山法華経寺一四世（本法寺歴）功德院日通という人が、元和八年（一六二二）に四十巻、目録一卷をそえたいわゆる現在伝えられている録内御書四十巻、一百四十八通の本を発行した。これが元和版であります。稲田先生が『本尊抄』を一冊だけ持っておられる。これもたった一冊しか現在残っていないといわれております。また他に、あるいはあるかもしれません、出てくるかもしれませんけれども、現在のところ、そういう風に考えられております。さてその次に、寛永十九年（一六四二）に中島四良左衛門という人が、録内四十巻一百四十八通、目録一卷をそえて出しました。この御遺文は、一番『立正安国論』からずうっと番号がふつてあるのです。そこで、番号本、番付本という名で知られております。これが寛永度におけるところの第一回目の刊行です。第二回目には、翌年の寛永二十年、庄右衛門という人が録内御書を四十巻、目録一卷をそえて出した。次に、やはりこの寛永二十年の頃に、勘左衛門という人が同じく録内四十巻、そして目録一卷をそえて出した。

さて、皆さんもちょっとお考えになるとわかりますけれども、日蓮聖人の御書、たとえば今、我々が知っております御書・遺文集、分量なんかは違いますけれども、今のように印刷技術が盛んに発達している時でさえもなかなか困難なのに、この寛永―これは徳川家光、三代将軍の頃になりますけれども―の頃に、録内四十巻を十九年、二十年の二カ年で、三軒の本屋がそれぞれ別の日蓮聖人御遺文録内御書を出したということは、誠に驚嘆すべきことである、と、こういう風に考えざるをえません。まあ皆さんのうちで版木でお札を摺るような人はこのごろはほとんどもうないでしょうね、昔のように籠注連かまじゆだとか、あるいは節分なんかに黒札を摺ったり、普通の白札を摺ったりなんかする

ような寺は段々なくなってきたでしょうね。黒札というのは普通の札よりも難しいのです。黒札が摺れるようになると版摺りは一人前といわれるぐらいのものです。ところがまあそういう風なことをしている人も、このごろ段々少なくなつて、大抵もうコロタイプ版でもってどんどんとすつてもらい、昔の版摺の苦しみを知っている人はないと思ひますけれども、桜の板に文章をかき、これを彫りあげ一枚一枚摺っていくのですからね。これを録内四十巻、まあ一冊約三十五枚から四十枚位のもの、四十巻というと、まあ千二百枚位はあるでしょうね。そういう版下を彫つて摺つて、そしてそれが売れていった、と。作られたということは売れていったことですからね。いくら作つたつて売れなきや本屋はそんなに無理して損はしませんから、売れていったということは、いかに日蓮聖人の御遺文が希求されておつたか、という一つ大きな事例になると思ひます。

これから五、六年たつた正保四年（一六四七）に、品類御書というのが出ております。これは、日雅という人が御書を部類分けによつて集めたもので、これが六巻、正保四年に刊行になつてゐるのです。

今まで紹介しましたのは録内御書でありますけれども、今度は録外御書が出されました。他受用御書と申しまして、これは慶安二年（一六四九）ですから、品類御書が出されて二年後のことです。二年後に他受用御書が出された。他受用といふことは、もちろん自受用といふことばの反対のことばです。自受用といふのは何かといふと、六老僧が自ら発起をして作ったものだから自受用といふ、他受用といふのは録内ができて、そのあと後世の人が集めたから、そこで他受用といふ、この録外御書のことを他受用御書とこう名づけました。この他受用御書七巻には一百八通の御書が集められています。さて録内御書は、勘左衛門版であるとか、庄右衛門版であるとか、あるいはいわゆる番付け本であるという御書が出て、録内は手に入りやすくなりましたけれども、録外はこの他受用御書一本しかありませんから、慶安二年に出された他受用御書が、寛文九年（一六六九）ちょうど二十年後に再版になりました。録外御書が再版になるということは、録内が三種類も出ており、その後には他の録外御書が出ておらんとするところからも考慮され

ねばならぬ所ですけれども、ともかく録外御書が再版されたということは、これもまた大きな注目すべき事であると
言わざるをえません。

次に今度は、寛文二年（一六六二）に治右衛門という人が、今まで本満寺録外、三宝寺録外、玉沢録外と転写され
ていた録外本が三種類あったのを、ひとまとめに整理をいたしまして、これを二十五卷二百五十九通に集めて出版し
ました。この録外を治右衛門版といいました。寛文年間に出た録外本です。

次に、今までそういう風な録内録外が出ておりますけれども、どうもそれぞれの版によってそれぞれの違いがある。
これらはあまりよろしくない。ともかくそのころ、恐らくは百部摺本なんかを持っていった人があるだろうと思いま
すが、またあるいは中山・身延等をもって日蓮聖人の御書、御真蹟と対照することのできた人もあったかもしれませ
ん。そういう点から、当時武村市兵衛、村上勘兵衛、八尾甚四郎、山本平左衛門、こういう人々が共同しまして御書
の校訂をこころみ宗門書堂という本屋を共同経営し、この宗門書堂から録内・録外の御遺文を出した。これを宗門書
堂版といい、同じように録内は四十卷、一百四十八通、それから録外二十五卷二百五十九通を数えますがこれらが出
されました。今は明治以降になって縮刷遺文であるとか、昭和定本が出ておりますから、おきますが、それ以前はこ
の宗門書堂版の御遺文でもって統一されておったということができません。

さて、宗門書堂版ができて、やはり段々と学匠がそれを調べておきますと、どうもおかしいところがあるとい
うので、宗門書堂版をもとにして、平楽寺の村上勘兵衛がこれを宝暦六年（一七五六）―宗門書堂版が出されてちよ
うど百年目頃に改訂版を出した。これを宝曆修補本といいます。

こういうふうにして沢山の御遺文が出たわけですが、何故にこのように多くの日蓮聖人の御遺文が出されたのか、
また何故にこのように沢山出された御遺文が売れたのか、ということについては、やはり少し考えなくてはならない
点があるように思います。（こんなことは、此度冠先生が出される本の中に書いてありますから、あとでよく読んで

おいて下さい。)ここで少し考えてみますと、これは日蓮宗に一宗をあげて学問をするという風潮がおこってきた。もう一つ、日蓮宗に対するため他宗の人々が日蓮宗の教義を勉強しようという気運が澎湃としておこってきた。こうした事情によってこれだけ多量の録内・録外が出版されるようになったと思われれます。

では、何故そういうふうなったかと考えてみますと、中世末期、近世初頭になりますと、織田信長であるとか、豊臣秀吉であるとか、或は徳川家康とかが出てきますが、これらの強力な政権担当者たちは、叡山であるとか一向宗であるとか法華宗であるとか、特に一向一揆・法華一揆などというのは制覇のためには一番の邪魔になった存在であった。法華宗は天文五年(一五三六)の天文法難によって徹底的な打撃をうけ、一向宗は信長がこれに全力をそそいで排撃、叡山の山法師に対しては信長は元亀二年(一五七一)年に不意打をして叡山の智者上人山内の老若男女三千余人に至るまでこれを殺しつくした。こういうふうには制覇のために邪魔になる宗教勢力を徹底的に排撃しようとした。そういう気運の時、日蓮宗は天文法難で洛外追放になり、泉州堺に逃げるわけですが、天文十一年に帰洛の勅許がありました。そうすると天文十六・七年には日蓮宗二十一箇本山のうち十五箇本山がたちまちのうちに復興するのです。きわめて強烈な再興の意識にもえて、法華宗は京都に再び強大な勢力をふるおうとした。

この勢力に対して信長が何とかしてこの勢力をおさえようとしたのが安土宗論です。天正七年(一五七九)信長は当時まったく勢力がなかった浄土宗と争わそうとした。日蓮宗では元来「言うにかいなき浄土宗、禅宗」といい別して浄土宗に対しては宗門は四十余年未顕真実という点から歯牙にもかけなかった。当時浄土宗にはまったく軍事的な勢力も政治的な勢力もありませんでしたから、勢力の弱い浄土宗と日蓮宗とをかみあわせて日蓮宗が負けるようにする。日蓮宗は日頃から宗論、宗論といっているからその精神的支柱を宗論によっていたためつけようとしたのが安土宗論だったわけです。安土宗論によって日蓮宗は信長の謀略にひっかかりまして、ついに詫証文を出さざるを得なくなつて一宗火の消えたようになりました。とにかく当時の史料を読みますと、洛中の信者が街を歩くのに面をあげて、

歩けなかったといえます。徹底的な恥辱を与えられたのですね。天正十年に信長は殺されますが、そこではじめて日蓮宗は豊臣秀吉の采配によって今まで出したところの詫証文は不当のものであるというので、これを破棄してもらうことができました。

西山本門寺十八世に日順という人があります。この人は元禄元年八十八歳でなくなっており、逆算しますと慶長六年の生れです。若い頃は安土宗論などいろいろ聞かされておったのでしょうけれども、この人の記した過去帳が西山本門寺に残っております。この過去帳の二日の項、天正十年六月「信長被誅」とあります。普通、目上の人（主君）が目下の者（臣下）を殺す時「誅」といい、目下の者が目上の人を殺すという場合は「弑」といいます。普通ならば「信長被弑」と書くのが当然です。しかるにこれには「被誅」とあります。これによって当時の日蓮宗の人々がいかに信長に対して悪感情をもっていたかが如実にわかります。江戸初期の過去帳などというのはめったに残っておりません。有名な平賀本土寺の過去帳が残っておりますが、日蓮宗関係ではあまり残っておりません。その残っている中で、この西山本門寺に所蔵される日順さんの過去帳に「信長被誅」と記るされているわけですが、この例から見ても当時信長に対する日蓮宗の各派一般の感情がわかるうと思っております。

豊臣秀吉は、信長によって強制的に書かされた浄土宗への詫証文を取りあげて、これを破棄します。ところがその後、文禄四年に秀吉は自分の六親九族父母のために大仏をたてて、これによって先祖の菩提を弔らおうとした。いわゆる千僧を召請して供養を行おうとしました。この千僧供養について日蓮宗では宗制を守りぬくか否かの岐路に立つというわけで重大問題化するわけです。これは皆さんもよく御存知の通りであります。これによって供養会に出席すべきである。出席すべきでないという議論で教団が全く二分してしまいます。

元来、安土宗論のとき、堺の妙国寺の仏心院日琬という人がおりますがこの人は当時の日蓮宗の学匠のうちで最もすぐれた人で、三光勝会の講主でありました。この人は、一般的には、極めて摂受的な融通的な人であり、その教学

は泉南教学といわれ、摂受的寛容的な教学をもたらした、といわれております。けれども、実は日珖という人は極めて強烈な折伏主義者でありました。三井園城寺学頭祐尊という人について唯識を学んだことがありますが、この祐尊という人は日珖が盛んに諸宗折伏し、四箇格言を基にして弘教活動をしているのを見て、私は日珖に「念仏無間」などという法門を教えたことはないにもかかわらず、何故に彼は「念仏無間」の法門の談義をするのかといて嘆いています。そういうことが、日珖の弟子の一如院日重の『見聞愚案記』の中に書いてある。そして、日珖の信者で阿波国守三好長治が阿波一国を法華宗にしようとして、生まれた子に至るまで法華宗にしようとした。阿波国は真言宗と禅宗が盛んでしたから、「これではどうにもならん」というわけで、国の人々は真言宗の僧と禅宗の僧とを呼んで日珖と宗論をさせることになりました。このころ京都方面にいました日珖はわざわざ阿波に赴いてこれらを論伏させて「理運の感状」をうけて帰ってきました。というふうな、それぐらい折伏的な人であったのです。

ところが、安土宗論で屈辱的な目にあって自分達も殺されそうになったし、勿論、その時の立役者であった普伝日門であるとか、大脇伝介であるとか、建部紹智とかいう富裕な商人達を信長は自分の面前で斬り殺しており、そういうような殺戮、脅迫から託証文を出すようになったのです。

日珖は、安土宗論の後、天正十八年（一五九〇）に『神道同一鹹味抄』というのを書いております。これはどういうものかと申しますと、神道も仏法も同じ大海の中に入れば、同一の鹹味、塩からい味になる、というような意味で名づけたものです。この書の中で、「日蓮聖人の頃は折伏は大事である。けれども今でも折伏は大事である」といって折伏をすると人の物笑いになる。今の世は摂受も面白いぞ。捨身武者といわれ功成り名をとげた人が、これからは命を全うしようぞ、と仰せられることがある。今はちょうどその時節である。我々は必ずしもそういうふうな折伏を面に出さず、摂受で暮らすのもまたよいことだ」、というようにことを述べているのです。これが、いわゆる泉南教学の基本になるのです。爾来、学徒の教育は天台教学を基として強烈な祖書中心主義の教学から漸次はなしていく。若

い人達は血の気の多い人ですから、早くから日蓮聖人の御書を教えると血気にはやっても折伏的になりやすい、というわけで段段／＼と天台教学の、いわゆる円体無殊、妙義無殊というふうな円体同の教義の方に引入させるようになるのです。「此妙彼妙妙義無殊、但以帶三方便ニ不帶三方便ニ為異」といって、これは有名な言葉ですけれども、要するに円体無殊というのは、約教釈の立場であって、「但以帶方便不帶方便為異」とこれを約部釈にもってこなければいけない、とこういうふうに言うのが『玄義』の真義であります。一般には「円体無殊・此妙彼妙妙義無殊」という立場がとられて、法華以前の経々の妙も法華の妙も妙は同じものである、そういう考え方が天台宗の一般的な立場ですが、これによるのが、泉南教学といわれています。

さて、そういうふうに、京都では長老日珙上人の後を承けた日重が、当時最も傑出した人でありましたから、日重のそういう摂受的な態度が一般に当時の京都法華宗を指導しようとしたのです。しかるに、京都に二つの流れがありまして、その流れが今申しますところの円体無殊の立場をとる約教釈の方の人達と、もう一つの立場は諸宗無得道法華独一成仏を説くところの折伏主義的な約部釈にのっとるところの妙覚寺の一門です。こういう二つの流れが対立するのです。妙覚寺一門は関東の池上本門寺の流れの教学をうけ、京都の諸寺は全部ではありませんが、一般的に円体無殊の立場をとりました。

この円体無殊の立場をとったのが、これがいわゆるゆるやかな方の千僧供養会に出てよろしいという立場です。これと千僧供養会に出ることは宗制を失ってしまい、墮落してしまふ基である、という妙覚寺一門との対立になるので、要するに、これは国主が供養の施主ですから、国主の供養に出席しないというのは国主に対する違背である。物をもらうのに、これが好きであろうが好きでなからうが、いただくのが、これは自分の勝手、自由な行為です。自分の好きのみで気ままにできることです。いくらおいしいものでも、腹がいっぱいですから私は食べません、と食べれば食べなくともよろしい。どうしても食べてくれと言われれば食べることもありますね。要するに

自分でもって判断することである。国主の供養をうけようがうけまいが、それは自分で判断することである。その寺でもって判断することではない。こういうふうには考えますと極めて簡単ですし、これが一般の人や或は大金持からの招待でしたら「供養を受けますことは我々の方では謗法になりますから」といつて断ることができません。

けれども、時の天下の実権者であるところの豊臣秀吉に向けて「これは謗法の施であるから受けられません」などと言うことは、これはちょっと言いにくいですね。要するに、これは結局、天下の権威と対決することになるのですから、これと対決して千僧供養会に出仕しないなどというのは、極めて強い意志の力が必要でしょう。すなわち謗法供養を受けないのは最もすぐれた折伏である、と、こうして日奥は妙覚寺を退寺しました。ところが秀吉はその時に「法華宗ならあたり前の事だ」と言ったのです。秀吉は尾州中村の生れで、中村というところは法華宗の信者の多いところで加藤清正であるとか小出秀政であるとか、法華宗の信者が沢山おります。秀吉は「わしは尾州中村に生れたから、法華宗が他宗の供養を受けないことをよく存じている。若しこれを受けるようなら、それは日庸取である」と、こういったというのですね。これは日奥も書いておりますし、鷲山院日箋も大仏謗法供養出仕についてという小さな五・六枚程の記録にこれを書き残しております。秀吉は太っ腹な人でしたから「なあと、出なくたっていいのだ」と言っておったわけです。ところが秀吉はまもなく、慶長三年（一五九八）に亡くなります。

そうすると今度は、当時内大臣であった家康が政権を担当します。ところが、当時謗法供養に出たとか出ない、ということをめぐる京都市の長老派の諸寺に対し、日奥は盛んに攻撃するのです。日奥と一緒に寺を出た人に本國寺の究竟院日禎という人がおりますが、この二人が中心になって日重・日乾等を批判したのですね。そこで、秀吉が亡くなりなると日重・日乾並びに諸寺は家康に向けて「何とか日奥を千僧供養会に出席させるようにしてほしい」と訴えた。その当時まだ豊臣家は健在ですから、豊臣家の供養会を家康はそのまま諸大名と共に引き受けたわけです。ですからこの訴えに対して家康は、自分が政権の責任者になっておりますから、当然日奥に対して「出席せよ」と勧める

ことになります。日奥は「いや、私共は祖師の命を体して宗制を堅持いたしますから、出席することは免じていただきます」と言つて出ようとしません。そこで家康は「お前は日本の国に住んでおる。然らば普天の下王土に非ざることなく山海の万国国王の有に非ざるものはない。お前は日本の国民としてこの国に住んでおり、自分は日本の国王である。日本の国主の支配する国に住んでおりながら、国主の言うことを聞かないのならば、昔、伯夷叔斎がわらびを食べて首陽山で飢え死にしたように、お前も飢え死にすべきではないか」と責めたということです。日奥はこれに對しまして「御説は確かにもっともでございますけれども、この三界は變化流転するもので、定まった国主というものはありません。この三界の眞の国主というものは釈尊であります。我々は釈尊の仰を承つて法華經を弘め、この三界にあって國の土毛を喰むのであります。伯夷叔斎はたしかに賢人でありましたが仏法渡來已前の賢人でしたから未だ三界の本主を知らず、ために麻子ましに難ぜられてむなく首陽に飢えたのであります」と強言をもつて恐れる所なく返事をしたのです。日奥は、これで自分はたちまち首を切られるかと思つたでしょう。けれども「道理至極せるにや首をはねられずに対馬に流罪となつた」と書いております。とにかく家康はそれによつて「これ程の強義を言う者は、いままに大事を起すであらう。天下政道の手始めに嚴重な御成敗あるべし」というので、首こそ切られなかつたのですが、對馬に流されたのです。その後對馬にあること十三年、慶長十七年に赦されて歸つてくる。まもなく元和元年（一六一五）に大坂夏の陣が起り、豊臣氏が滅びると同時に千僧供養会も自然消滅になる。家康も元和二年に亡くなる。

こういうふうには、千僧供養会の問題をめぐる不受不施騒動というものは夏の陣の終りとともに解決することになるわけです。そうして元和九年（一六二二）に幕府は不受不施御免の公許状を出すことになりました。ところがそれからまもなく寛永七年（一六三〇）の頃になってきますと、京都教団の勢力が江戸に移ります。今まで京都が幕府の所在地であつた。ところが天正十八年（一五九〇）に家康が関東八州を手に入れますと、だんだんと江戸に勢力が移つてくる。豊臣氏滅亡後、家康は江戸を拠点とするようになります。そうしますと、政治・經濟・軍事・宗教・文化は滔

々として京都から江戸に移ってくる。仏教方面でも大きな寺々は京都に本拠を置きながら江戸に出張所を設けた。江戸を中心にした宗教政策の受け入れをしなければいけないようになってきて、各宗派の業務の中心は江戸に移ってくることになります。江戸に移って各宗それぞれの根拠地を得ようとする。日蓮宗ではどうかと申しますと、関東には池上・中山・平賀・小湊・碑文谷などに代表的な諸寺があります。当時身延の江戸におけるところの本拠地というのはわずかなものであり、末寺などというものも江戸にはわずか十カ寺くらいしかなかったのであります。

こうした状況の中で、京都の日重・日乾・日遠たちが身延の貫首になっていて身延を前進根拠地として京都の勢力を江戸にのばそうとします。そこで関東の諸寺と身延に代表される関西の諸寺との激突が江戸で起ってくるのです。結局それがどういような解決になるかと申しますと、寛永七年に江戸城において身延と池上との対論が行なわれることになり、その対論の内容は『身池対論記』『延池評論記』といわれる記録で残されており申すけれども、対論は寛永七年二月二十一日に行なわれ、幕府は天海僧正・本光国師・大老酒井雅楽頭忠世等を始めとする幕閣を江戸城に集めて三回・四回と、池上と身延との間の決着についての相談をします。何しろ身延の方には養珠院夫人が元氣でありますし、相談を重ねて、結局対論の内容に立ち入らないで処理しようとなりました。対論の内容自体については、池上方の方が有利ですからその内容に立ち入らないで、権現様の掟に日奥が背いたということを基本的な観点とし、これに背いたというので日奥を再び対馬へ流し、池上方の七人をそれぞれ流罪とし、四月二日に申し渡しました。約一ヶ月余の間かかったわけであり申す。

この対論で、池上の長遠院日樹は信州の伊奈に流され、脇坂淡路守安元の許に預けられて翌八年の五月に五十八才で亡くなりました。

中山法華経寺の寂静院日賢は遠江国横須賀に流され、後に老中となった井上河内守正利の許に預けられ、平賀本土寺の了院日弘は伊豆国の戸田に流され、小西檀林の守玄院日領（この人は小湊誕生寺・小松原鏡忍寺の歴代であり

ますけれども）は奥州の中村、相馬大膳亮義胤の許に預けられ、下総中村檀林の能化であった遠寿院日充は奥州の岩城平、内藤帯刀忠興の許に預けられ、碑文谷法華寺（現在天台宗の円融寺ですが以前は日蓮宗であった）の修禅院日進は信州の上田、仙石越前守政俊の許に預けられ、小湊誕生寺の可観院日延は伊勢国、一柳監物直盛の許に預けられました。もっとも可観院日延は身池対論には出ておりません。自ら追放の列に加わったのでありますけれども、すぐに動いて九州の博多に移っております。

この日延は、加藤清正が慶長の役のときに、朝鮮の三人の子供、男の子と男女の姉弟この三人を連れて帰りまして、一人の男の子は後に本行院日遙といつて、熊本本妙寺の三世になります。それから、もう一人がこの可観院日延。日延の姉さんが備前国の庭瀬の戸川達安たつやすという人の室になるのです。この戸川達安の子供が九州の博多に行きますので、可観院日延は九州へ行くようになります。

これら流罪された人々のようすをみますと、井上正利は寂靜院日賢を請じて本源寺を造ってこれに帰依し、上田三町歩をこれに付したのです。豆州戸田に流された了心院日弘の場合は土地の人々が日弘を尊敬して、長谷寺を建てた。長谷寺というのは、日弘のいた平賀本土寺が長谷山といえますから、これに因んで付けたものです。それから、守玄院日領の場合は、相馬大膳亮義胤の老臣池田次郎左衛門尉直介が仏立寺を造ってこれに帰依し、内藤帯刀は窪田という所に家を造って遠寿院日充を住ませ、藩の子弟を教育させたというのです。この人はずいぶんのんびりした流人でありまして、元来が下総中村の方の出身でありますから、土地の人々が中村から窪田の日充を見舞いに来るのです。そうするとその時留守だった。あとから手紙が来まして（その手紙は今でも残っています）どこへ行ったのかというところ、この間はずいぶん来ていただいたのに留守をしてすみませんでした、湯治に行っていたので留守をしておりまして、と、こういうのんびりした流人であった。あるいは信州上田に流された修禅院日進の場合は、仙石政俊が自分のお母さん（妙光院と申しますが）の為に日進の住庵法泉院を改めて妙光寺を建てて日進を開山とした。

こういうふうには、池上樹師は早く亡くなりますけれども、他の人は、預ったところの国主たちが最大級の外護を加えて崇拝しているのですね。このことによって、当時の流人僧が、どれだけ人格的にすぐれておったか、ということがよく分ると思います。

こういうふうにして考えてみますと、身延方では、池上本門寺を手に入れ、京都の妙覚寺を配下とし、また、小西檀林・中村檀林・飯高檀林、この三檀林を身延の支配下に入れる。そして、碑文谷法華寺とそれから平賀本土寺と小湊誕生寺を支配下に入れようとするのです（これはなかなか成功しませんでしたけれども）。ともかく、こうして身延方（関西長老方）は関東の雄山や檀林を手に入れることができたわけです。

この頃、日蓮宗の人々の中には、宗門の甚だしい動揺を見て、これに見きりをつけて離れてゆく、いわゆる脱宗者を出すようになります。

大仏千僧供養会の頃、文禄四年九月に練意・春門という人が天台宗に移り、慧雲・友尊という人が律に移ったと『録内啓蒙』に載せられています。とにかくもう日蓮宗に嫌気がさしてしまっただけで、どうせ自分たちはだめだということで、日蓮宗を捨てて他宗に移ってしまう。あるいは、練意という人、これは円耳と同一人物なのではないかとされています（妙覚寺日奥は練意と言っていますが）。円耳は天台宗あるいは禅宗（一般的評価では禅宗となっておりますけれども）に移った。この人は非常な学匠でありましたから、人々の尊敬を得た。また、良澄という人も、これも天台宗に移り、了性という人は律宗に移ったという。この了性という人は、深草の元政、それから中正院日護のあとを継いで、鳴滝三宝寺の二世となった本覚院日英、こういう人たちと非常に仲が良く、『本覚日英伝』の中には了性と交際することが記されています。こうした脱宗者の中でも一番有名なのが舜統院真超であります。

この人は元来が円韓日超と申しまして、京都の妙蓮寺で得度し三十年あまり関東で勉強しまして、寛永十年（一六三三）に妙蓮寺へ帰ってまいりました。この人は六十四才で万治二年（一六五九）に亡くなっておりますから、逆算

しますと慶長元年（一五九六）の生まれです。寛永十年（一六三三）三十七才の時に妙蓮寺に帰ってきて、そして妙蓮寺の譲りをうけて、十八世を承けたのです。妙蓮寺は京都の八品派の本山です。ところがこの人は「自分くらい偉い学匠はいない」と慢心し、いばりかえつたらしく、そのために人々から嫌われて、寛永十二年、たった二年間の在位で追放になる。追放になってしまつて、何とかもう一度妙蓮寺に帰りたいと思ひ猛運動をするのですが人々が受け入れてくれないものですから、今度は天台宗に改宗しようとして叡山に登り、天台宗の僧になりました。こうして寛永十四年『破邪顯正記』五巻を書くのです。この本は日蓮宗に対して徹底的に悪罵を加えたもので諸宗の間で非常に評判が良い。とにかく天台六十巻に通じ、録内四十巻、録外二十五巻に通眺している、三十年もかけて勉強した人です。日蓮宗の良い所悪い所をよく知っておる。一番問題となるところは天台の一般的宗風である円体無殊の立場、約教判の立場に立つて日蓮宗を攻撃する。あるいは、日蓮の生涯の中で、たとえば生まれた時に蓮華ヶ淵に蓮華が咲いたとか、死ぬ時に桜が咲いたとか、小松原法難で景信が落馬したなどと言うが、それは大嘘だ、というのです。自分は長い間上総下総を歩いておつて房州にも何度も赴いた、房州の景信の生まれた所を歩いて子孫の所にもお参りしたことがある、そして彼らが言われるには景信は天寿を全うしたと言われている、景信が落馬して死んだなどというのは、これは日蓮党の大嘘である、と言つて批判する。また、日蓮が竜口の法難で切られそうになつた時に刀が三つに折れたというが、日蓮の遺文の一体どこにそんなことが書いてあるか、これも日蓮の末弟どもが作つた大嘘である、とこういふような話が出てまいります。それから、日蓮は年老いて身延を下り、病氣を治そうとして常陸の加倉井温泉に行こうとして、ついにそこに行くことができないで、池上で死んでしまつた、彼は死期（自分の死ぬ時）も知らない凡僧である、といふふうな筆致でもつてどんどん攻撃しましたから、天下に快哉を叫ばせたのですね。今まで日蓮宗というものは、いわゆる本化別頭とか申しまして、難しいようなことを言う。しかも念仏無間禪天魔真言亡国律国賊と言いますから、読んでいて腹が立つのでしょね。読もうとしない。何で日蓮は南無妙法蓮華經

を唱えたのかということも、気持ちが悪いから読もうとしない、ですから猶更わからない。

そこにこの舜統院真迢が、わかるように本を書いた。今でもわかり易い本というのは誰でも喜びますからね。ところがなかなか書けない。真迢だから書けた。大変な喜びようでみんなが買いましたから、売れて売れて、寛永十四年に出版した五巻の『破邪顕正記』が、二年後の十六年には再版を出したのです。再版を出したのですよ。あの頃ですから本は高いでしょう、おそらく。その高い本を買ひ（日蓮宗は切歯扼腕しましたけれども）他宗の人は拍手喝采して喜んでこれを読みましたからね。随分売れた。あまり評判が良いものですから寛永十九年天海大僧正が真迢を呼んで寛永寺の講經の役者に任じたのです。そして薬師堂に住まわせて役者を務めさせたのですが、ところがこの人は、やっぱり他所へ行っても好かれなかったようです。あくる年、寛永二十年には天海が百八とか百二十二才で亡くなってしまいます。年齢のことは定かではありませんが、いずれにしても百才以上まで生きたことはたしかでしょう。天海という人はなかなかの人です。日遠上人が慶長宗論の時に「もう一度宗論をさせてほしい。あれは宗論ではなくて暴論である」とこう言って家康をかんかんに怒らせてしまい、静岡の安倍河原で殺されようとした。その時に養珠院夫人が家康を諫めて、刑死をまぬがれたことがある。そこで遠師は身延は自分が住むべきでない、というので身延を出て大野山に引きこもり、そこで本遠寺を建てて任んだのです。ところが、元和元年（一六一五）に遠師が再び身延に行きますが、その時に天海大僧正が「上の仰せである、もう一度身延に行かれるように」と言って、招請した手紙が大野の本遠寺に残っています。この人は身池対論の時にも、親しかった池上日樹と非常に仲の良い話をされていることが日樹の『摧破乾遠邪義抄』に見えます。

さて、真迢はこの天海大僧正が亡くなったら、またいざり出したとみえてとうとう二・三年でまた追い出されてしまつて、いたしかたなく京都に帰って町屋に住むようになります。

真迢にはこのような経緯がありますが、この『破邪顕正記』に対して日蓮宗はどうしたかと申しますと、先程申し

ました守玄日領は『格言』一卷、それから『日蓮本地義』二巻これを書きました。正保四年(一六四七)のことです。『破邪顯正記』が寛永十四年に出版されてから十年後には、もう反論書が出ています。とにかく困難な出版事業でありながら真迢に対するとすぐ出たのですね。その前に寂靜日賢が『論迷復宗決』一卷、『同別記』というのを書いております。守玄日領も寂靜日賢も真迢が勉学時代のお師匠さんです。真迢が松崎檀林あるいは中村檀林で勉強している頃に二人はよく教えましたから、日賢は『論迷復宗決』、「迷いを論じて宗に復せしめる決」つまり、迷いを論してもう一度日蓮宗に帰ってくるように、という意味の本ということ。『論迷復宗決』『同別記』を寛永十八年(一六四二)に刊行しているのです。原稿ではない。刊行しているのです。長遠院日遵(この人は小湊誕生寺の歴代で、それから家光將軍の姉さんの千代姫、尾張の徳川家に嫁入りますけれども、この千代姫の外護を受けた人でもあります)もまた真迢に恩分をかけた師匠ですが『諫迷論』十巻を慶安三年(一六五〇)に出版しております。『破邪顯正記』から十三年後のことです。「迷いを諫める論」です。三浦大明寺の慈光日航という人は『破魔正理集』一卷(これは出版されておられません)という本を書いております。

ともかく、『破邪顯正記』に対して不受不施派の諸師が反論書を書いて、たちまちそれが刊行されている。

これに対して真迢は、自分の弟子の真陽(この人は実在したかどうかわかりませんが)の名前で、『禁断日蓮義』十巻を書いたのです。承応三年(一六五四)に原稿が完成し、寛文二年(一六六二)、八年後には刊行されています。この刊行されました『禁断日蓮義』に対して、先程申しました日航が『摧邪真迢記』を万治三年(一六六〇)に刊行している。『禁断日蓮義』は寛文二年に刊行されたにもかかわらず、これ以前に既に転写されていたようにその転写本を慈光日航はもらってこの破書を書いたのですが、『禁断日蓮義』が世に出る二年前ですね。あるいは観妙院日存(紀州の養珠寺・京都本満寺の歴代)は同じく万治三年に破書を書いています。これが『金山抄』(十六巻)です。これは万治三年に原稿ができて、十二年後の寛文十二年(一六七二)に刊行されています。また、

蓮華院日題は『中正論』『中正或問』『添略中正』という反論書を書いておりますが、こういう書物がほとんどほとんど出版されてゆく、そうして、真迢の破書に対して人々がいさんでその反論を書いている。これがやはり、日蓮聖人の遺文が出版され、御書が売れる大きな原因になったのであらうと考えられます。『破邪顯正記』『禁斷日蓮義』を見るかぎり、これは円体無殊の立場に立っておりますから、こんなことは各宗でもう知っていることなのです。各宗で知っていることなのに、今までは日蓮にくしで読まなかったのです。だからわからなかった。けれども、こんなことであるならもう少し日蓮のものを見ようではないか、ということが日蓮宗以外の各宗の間に広まっていいたということは、当然考えることができることです。

それで、その影響を受けて、日蓮聖人の御書が何回も何回も、繰り返し繰り返し発刊されて、しかも売れゆきが良かったということの理由であったと思われるのであります。録内・録外の御書が、宗の内外から求められるに至って、かくして考えられることは、日蓮宗に対する諸宗の攻撃は、ひとえに真迢の功業によるものであり、沈滞した宗門に活を入れたものは真迢の毒舌であったということも言えるわけです。先哲の間によく「いや、実は真迢はあまりにも日蓮宗が萎靡沈滞しているの、外から刺激を加えて活を入れた者である」というふうな好意的な見方をする人のあつたのも、これもまた当然のことであると考えることもできるわけでありませう。

ここで、ちょっと申し上げておきたいことがあります。先程蓮華院日題の話をいたしました、この蓮華院日題の系流が、いわゆる不受不施派の一流である日題派となつてゆくのであります。日題は『中正論』二十一卷、『中正或問』五卷、『添略中正』六卷、その他に沢山の書物を書いてあります。『日蓮宗学章疏目録』を見ていただくと、二頁に亘つて三十編余の著作が載っています。これ程この人は学匠でありました。ところが、安国院日講などに言わせますと「彼は元來が偏狭な人間であつてももの分別のつかない者である」と、ひどく指弾しておりますし、あるいは寛文五年・六年の不受不施派大弾圧のときに、讃岐に流された雑司谷法明寺の智照院日了、上総興津妙覚寺の日堯、

伊予の吉田に流された平賀本土寺の日述であるとか、熊本の人吉に流された明静院日浣などという人々は日題に対して、これに正統性を認めない発言をしております。日題はのち不受不施派のうち一派を唱導しますが、ひょっとするとおそらく真逆のようになる人であったかも知れません。

もう少しここで申し上げたかったですけれども、時間が来たようです。結局今日申し上げましたのは、御書の出版について、何故あのような出版ブームが起ったのであろうかということと、不受受の問題についての二つを申し上げますことができました。今まで何回も何回も申し上げていることですので、皆さんの中に、或は耳新しくない人も、また耳新しい人もあったかと思いません。

私の教導生活はここでストップするではありません。菩薩には教化の終りがありません。化を他界に遷すまで私は菩薩の道念をもってやりたいと思えますから、皆さんも同じように菩薩の念願、菩薩の心地に住して勉強していただきたいと思えます。どうも長い間御静聴ありがとうございました。

(本稿は、昭和五十八年一月十八日・二四九番教室にて行なわれた宮崎英修先生最終講義を筆録したものである。)